

Title	Roxana の主題と構成
Author(s)	仙葉, 豊
Citation	Osaka Literary Review. 15 P.37-P.50
Issue Date	1976-12-25
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25679">https://doi.org/10.18910/25679</a>
DOI	10.18910/25679
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Roxana の主題と構成

仙 葉 豊

## I

Daniel Defoe の最後の本格的小説といわれる *Roxana* (1724) には、その批評上二つの大きな問題がある。thematic coherence に関してと、不自然な物語終末部に関しての二つである。*Robinson Crusoe* (1719) に最も典型的にあらわれる回心の pattern が Defoe の小説の多くに認められるのは多くの批評家の指摘するところである<sup>1)</sup>。新興中産階級に属する人物が、その絶えざる努力と忍耐で富と成功を勝ち得てゆく成功談の裏には神に目覚め、過去の悪業を悟り、回心に到るという宗教人的側面が存在し、これが前者の経済人的側面と常にパラレルな関係をもってすすんでゆくというわけなのだ。

ところが注目すべきことには、この小論で扱う *Roxana*, それと *Moll Flanders* (1722) には、この回心の pattern とは正反対の墮落の pattern が見い出される。*Crusoe* が神指向的形式を備えているのに反し、*Moll*, *Roxana* は悪魔の誘惑による主人公の墮落の軌跡がそのchronological な語りのうちにみられるのだ。獄中での回心が見られるという意味では、*Moll* は *Crusoe* 的回心の pattern にのっとっているように見えるが、物語には終始一貫して悪魔の誘惑のイメージが濃厚で、むしろ *Roxana* の如き damned soul 的特徴を持っている。*Moll* を *Crusoe* 的の神対富の対立二元論で処理した J. A. Michie の議論が<sup>2)</sup>、回心後の *Moll* の曖昧な宗教的良心を十分説明しきれぬように見えるのは、このせいではないだろうか。むしろの Defoe の関心が、人間の devilish な方向にむかっており、そのために回心の pattern が最終的に崩解していったと考えた方が自然ではないのか。

*Moll* はさておいて、このような意味で *Roxana* を眺めてみると、その主題構成に悪魔指向の pattern がみられる。これをたどるのがこの小論の目的の一つである。

さらになぜこの小説の結末が唐突で不自然になったのかという問題。主人公が救いを受けねば、その逆に神の罰を被るのが pattern としては自然である。*Roxana* を完全に damned soul として小説当初から Defoe が企図していたとすると、当然描かれてしかるべきこの罰の部分が欠落しているのはなぜか。当時の読者がこれを不自然に思い、Defoe の死後他作者の手になるこの部分の書きたしがみられたという事実を思い起しても、曖昧な結末であったことがよく分る<sup>3)</sup>。原因はどこにあったのだろうか。thematic coherence が最終的に崩れていった理由は、これも前述の問題と合せて考えてみたい。

## II

富裕な資産を蕩尽した夫が、ある日突然予告なしに家出し、以後連絡を断つ。残された *Roxana* は6才にもならぬ長女を頭に5人の子供を抱え、その日の食にも困る程の窮状に置かれることになる。まずこのような *Roxana* の苦境を救ってくれることになる家主の Landlord との関係を考えよう。*Roxana* の美貌と才智に一目惚れの彼は何くれとなく *Roxana* と女中の *Amy* の世話をしたあげくとうとう結婚の申し込みをするに到るのだが、ここで *Roxana* は良心に悩まされることになる。これは当時の婚姻法とも関連がある。Landlord は妻と別居中であり、*Roxana* は夫が蒸発してしまったとはいえ、当時の common law では7年間配偶者が音信不通の状態にならぬ限りは再婚が許されていなかったから、この二人の結婚は違法行為であり case of conscience の点から考えると adultery であり、*Roxana* 自らも認めるように “we... in the Sence of the Laws, both of God and our Country, were no more than two Adulterers, in short, a Whore and a Rogue;...” (43) となるからである。結末的には神の法の人の法も生きるためという Necessity には一步譲らざるを得なかったわけであるが、このような二者択一状況における *Roxana* を力

づけ、指嗾してゆくのが Amy である。“What, consent to lye with him for Bread?” (28) と Roxana につめよられた時にも “I hope you won't deny him” (28) と答えるが如き彼女の現実主義的弁舌は “Amy had but too much Rhetorick in this Cause” (39) と Roxana の認めるところでもある。彼女の argument の骨子は他国（たぶんフランスを指すのであろう）における法運用の寛大さを例にとり、違法行為までを合法化することにあり、これは G. A. Starr のいう casuistry 的思考法にあたるように思われる。

Why, I'll tell you Madam, says Amy, I sounded it as soon as I heard him speak, and it is very true too; he calls you Widow, and such, indeed, you are; for as my Master has left you so many Years, he is dead to be sure; at least, he is dead to you; he is no Husband, you are, ought to be free to marry who you will; and his Wife being gone from him, and refuses to lye with him, then he is a single Man again, as much as ever; and tho' you cannot bring the Laws of the Land to join you together, yet one refusing to do the Office of a Wife, and the other of a Husband, you may certainly take another fairly. (36-37)

自己の経験からして Defoe は、苛酷な法の下に喘ぐ人々への同情は十二分に持っていたが、作者の Roxana の撰んだ行為に対する意見は否定的であったと解釈すべきであろう。作者が一貫して用いている Devil のイメージは、Roxana が Devil にあやつられ Vice に染ってゆく姿を悪例として描いているように見えるからである。

Had I now had my senses about me, and had my Reason not been overcome by the Powerful Attraction of so kind, so beneficent a Friend; had I consulted Conscience and Virtue, I shou'd have repell'd this Amy, however faithful and honest to me in other things, as a Viper, and Engine of the Devil; I ought to have remembered that neither he or I, either by the Law of God or Man, cou'd come together, upon any other Terms than that of notorious Adultery: The ignorant Jade's Argument, That he had brought me out of the Hands of the Devil, by which she meant the Devil of Poverty and Distress, shou'd have been a powerful

Motive to me, not to Plunge myself into the Jaws of Hell, and into the power of the real Devil, in Recompence for that Deliverance;... (38)

Roxana にとっては amy の意見は全く悪魔の忠告というにも等しいものであった。“a Viper, and Engine of the Devil” という所以である。彼女の救い主である Landlord でさえ、悪行への “Snare” (38) なのであり、“meer Bait to the Devil’s Hook” (38) に見られている。気がすすまぬながら “the Necessity of my present Circumstances is such, that I believe I shall yield to him” (40) という具合に、悪魔の誘惑に負け、生きるために操をすててゆく Roxana は、しばらく後の Amy を Landlord と無理矢理一緒にする場面では、自己が完全に Devil の分身になってしまったことを意識することになる。“I was now become the Devil’s Agent, to make others as wicked as myself.” (48) このように Roxana は Landlord との関係においては、生きるためという Necessity と Amy の argument という二つの強力な動機からその墮落の第一歩を踏み出してゆくことになったのである。

さて Landlord がパリで商用中に盗賊に惨殺された後、異国の地で困り果てた Roxana を救うのは某国の Prince であり、彼が二番目の相手となる。

I have given you the whole Detail of this Story, to lay it down as a black Scheme of the Way how Unhappy Women are ruin’d by Great Men; for tho’ Poverty and Want is an irresistible Temptation to the Poor, Vanity and Great Things are as irresistible to others; to be courted by a Prince, who was first a Benefactor, then an Admirer; to be call’d handsome, the finest Woman in France, and to be treated as a Woman fit for the Bed of a prince; ... (64-65)

“black Scheme” という言葉がよく墮落の過程を示している。さらに注目すべきは、前のエピソードでは poverty という絶対条件があったのに対し、今度は Roxana は一万ポンドの大金を手に入れていることである。そこでこの個所では新たな motive として、Vanity と Great Things があげられることになる。Roxana の Devil への感染度が Poor-Poverty,

Rich-Vanity という対句表現のうちに容易に読みとれるであろう。

... the Devil, who had found the Way to break-in upon me by one Temptation, easily master'd me now, by another; and I gave myself up to a person, who, tho' a Man of high Dignity, was yet the most tempting and obliging, that ever I met with in my Life. (65)

さらに興味をひくのは二人の関係の醸し出す悪魔的雰囲気である。前のエピソードに較べると悪の行為に対する抑制力が薄れ、何か Roxana は魔力にあやつられるがごとく Prince のいいなりになっているような感じを与える。Prince を Hobbes が *Leviathan* のうちでいう Prince of Darkness と解し、Roxana をそれに魅入られた witch とはっきりいうのは極端にすぎるかも知れぬが、次のような個所には、両者のこ感的、魔的交感状態が読みとれるのではなからうか。

Never Woman, in such a Station liv'd a Fortnight in so compleat a fullness of Humane Delight; for to have the entire Possession of one of the most accomplish'd Princes in the World, and of the Politest, best bred Man; to converse with him all Day, and, as he Profess'd, charm him all Night; what could be more inexpressibly pleasing, and especially, to a Woman of a vast deal of Pride, as I was? (68)

人目を憚るため二人は好んで自分たちを密室状態に “shut-up” (67)し、“Idol”; “Admirer” (70) と呼びあい、Prisoner になぞらえて遊ぶのである。誤解を恐れずいえば、Sabbat 的雰囲気における魔王、魔女の密会とでもいえそうな気がする。

次は Dutch Merchant との関係。Prince との生活で処理に困る程の財力を得た Roxana は、今度は逆に盗まれることが心配になる。

... (I) had now no more Temptation of Poverty ... to introduce Vice, but was grown not only well supply'd, but Rich, and not only Rich, but was very Rich; in a word, richer than I knew how to think of; for the Truth of it was, that thinking of it sometimes, almost distracted me, for want of knowing how to dispose of it, and for fear of losing it all again by some Cheat or Trick not knowing any body that I could commit the Trust of it to. (110)

得た富のために人間不信に陥っているのである。パリの地で devilish な宝石商人 Jew の手から逃がしてくれた “Benefactor” であり “Deliverer” (135) でもある Dutch Merchant が、オランダで再会ののち求婚した際、嫌いなわけでもなく、まして子供もできているのにニべもなく拒絶する。Roxana の心理背景には、この富への依怙地なまでの執着があった。この時の彼女の議論が有名な ウーマンリブ論である。当時の婚姻法では妻の持参金はすべて夫の財産とされており、Roxana はこの不合理な “the opposite Circumstances of a Wife and Whore” (133) を説きつつ、wife の座よりも自由な mistress の方をとるというのである。当時の奴隷的ともいえる妻の座を時代背景として考慮に入れると、作者 Defoe が Roxana の意見をそのまま肯定しており、近代女権拡張論者の先駆的存在とみなされかねない程の迫力を備えているのがよく分る<sup>7)</sup>。

... But Infatuations are next to being possess'd of the Devil; I was inflexible, and pretended to argue upon the point of a Woman's Liberty as before;... (157)

だがこのような個所を読むと、Defoe 自身は、Roxana の意見を悪しきものとみなしているのは明らかで、satire の対象として描いていることが分るだろう。主題の展開からも、彼女の主張に対して作者は Devil の影を背後にひそませているのである。ある一つの観念に凝り固まり、他人の意見を入れる度量のなくなる状態を Defoe は非常に嫌い、このような “obstinate” あるいは “inflexible” な人物を悪しき人物典型として描いていることが多い<sup>8)</sup>。

Thus blinded by my own Vanity, I threw away the only Opportunity I then had, to have effectually settl'd my Fortunes, and secur'd them for this World; and I am a Memorial to all that shall read my story; a standing Monument of the Madness and Distraction which pride and Infatuations from Hell runs us into; how ill our Passions guide us; and how dangerously we act, when we follow the Dictates of an ambitious Mind. (161)

拙稿で説いた如く、Defoe の occult work には Devil が人間を誑かす方法として、possession, voice, dream, disguise などがあるとしているが、誘惑しようとしている人物の周りに適当な agent がいない時には、本人の心中に潜む邪悪な passion, あるいは inclination を刺激して、悪の行為に走らせる、ともある<sup>9)</sup>。この場合でも、Roxana は自己主張にのぼせあがって、自らの結婚の幸せを放棄したことになる。

Roxana を一躍ロンドン社交界の花形にする仮面舞踏会でのトルコ風ドレスとエキゾチックなダンスは、たまたま彼女のもとに女中として住み込んでいた長女の Susan とともに、後半部への筋の発展を示してはいるが、今までの論旨上むしろ Sir Robert Clayton との関係の方が重要のように思える。儉約をすすめたり、事業上の注意を与えたりする Roxana の信頼しうる financial adviser である Sir Robert は、ある日、商人との結婚話を持ちかけてくる。Sir Robert は財産をただ持っているより、この商人と一緒に、財産をさらにその活動で増してゆくことを勧めるのだが Roxana は二つの理由からそれを断る。一つは結婚すると女の独立性が失われ、現在享受している“Liberty of a Free Woman”(171)がなくなってしまうことである。彼女の論の行きつく先は“... seeing Liberty seem'd to be Mens' Property, I wou'd be a Man-Woman; for as I was born free, I wou'd die so”(171)というが如き、女性で男性同様の自由を持ち得るといふ Man-Woman 宣言になるのである。fiction の形態と比較して Defoe の真意をより直接的に表明していると思われる他の作物(たとえば *The Family Instructor*, や *The Complete English Tradesman*)においては、家父長制的父権の擁護を行っていることから考えても、前のエピソードにおいても Defoe の意見は、Dutch Merchant のそれに近いし、この場合も、Roxana の議論を“a kind of Amazonian”(171)とした Sir Robert に近いように思える。<sup>11)</sup>

... I aim'd at other things, and was possess'd with so vain an Opinion of my own Beauty, that nothing less than the King himself was in my Eye; ... (171-172)

## Roxanaの主題と構成

もう一つは、上述のうちにも窺える自己の美貌に対するうぬぼれである。前者が Dutch Merchant, 後者が Prince の段と関係があるのはいうまでもない。二つの悪が Roxana をがんじがらめにしていることになる。虚栄心のゆえに king しか眼中になく、相応しい相手として、Sir Robert のすすめる縁を断った Roxana なのである。

さてこの後しばらくして、Roxana は4人の男性の関係をふりかえて、次のように反省している。

... but as Necessity first debauch'd me, and Poverty made me a Whore at the Beginnig; so excess of Avarice for getting Money, and excess of Vanity, continued me in the Crime, not being able to resist the Flatteries of Great Persons; being call'd the finest Woman in France; being caress'd by a Prince; and afterwards I had Pride enough to expect, and Folly enough to believe, tho' indeed, without ground, by a Great Monarch. These were my Baits, these the Chains by which the Devil held me bound; and by which I was indeed, too fast held for any Reasoning that I was then Mistress of, to deliver me from. (202)

悪銭とはいえ、今では富裕になりおおせた Roxana がある時 “Why am I Whore now?” (202) という問いかけが頭に浮んだ時、このような男性遍歴と罪意識が重りあった形の回想がなされるのである。Moll が “... as Poverty brought me into the Mire, so Avarice kept me in,<sup>12)</sup>” といったように Roxana も自己が一步一步悪の深みに入り込んでいったことを自覚している。

さて今までの議論を表にしてみよう。

場 所	相 手	Devil 的 観 念	議論の当事者達		議 論
イギリス	Landlord	Poverty (Necessity)	Roxana	Amy	Lawful marriage
フランス	Prince	Vanity	Roxana	Prince	Flattery
オランダ	Dutch Merchant	Obstinacy	D. M.	Roxana	Free Woman
イギリス	King	Avarice	Sir Richard	Roxana	Beauty
(イギリス)	(Susan)	(Madness)	(Roxana)	(Amy)	(Murder)

Poverty, Vanity, Obstinacy, Avarice がそれぞれ、Devil の司る人間誘惑の方法であることを考えると Devil 化してゆく Roxana の段階がくっきりと浮きぼりにされ、一貫した悪魔の Temptation という主題を構成しているのが分る。rebellion-punishment-repentance-deliverance という pattern を *Robinson Crusoe* のうちに見出したのは J. P. Hunter<sup>13)</sup>であった。この神指向の pattern とは逆の墮落の pattern が Poverty-Vanity-Obstinacy-Avarice にみられるように思う<sup>14)</sup>。

### III

後半部分(203頁以降)では、長女 Susan が Roxana を追求するのがその本筋になっており、Roxana と Dutch Merchant との偶然の再会、結婚が副筋である。主筋、副筋といったところからも分るように、この後半部には、今まで Defoe の作品には見られなかった時間処理が存在する。一人称の語りと chronological な記述を特徴としていたものが、二つの事件を同時に進行させつつ劇的な効果を狙うような複雑さが見えはじめるのだ。フランスから刻々と送られてくる情報が Roxana の結婚選択に大きな役割を果す場面では、書簡体小説の形態をとり得る筈であったし、もしそうすれば Richardson 的 劇的構成も可能だったかも知れない。さらに後半部全体を考察下に入れると、Quaker の家での Dutch Merchant との再会、結婚、オランダへ渡るといふ脇筋は、一応後半部の丁度中央(265頁)で終わっており、それから時間を逆のぼって Susan の追跡と Amy の行動が最終部で語られているのに気づく。語りの時間と主人公の経験の時間が生硬なまでに一致していた Defoe 作品の特色がここでは珍らしく守られていない。後半部に入ってこのような劇的小説の時間処理が見られることは注目してよい。

加えて character にも大きな変化がみられる。Moll に較べて Roxana は冷酷で計算高く、それがこの作品の魅力を減ずる一因になっている、とはよく指摘されてきたことだ。確かに前半の Roxana の特性は狡猾ともいえる程の状況判断と自己の立場への認識力にある。苦境脱出の最善策を

得失を勘考しつつ選択してゆく彼女の姿勢は、ちょうど Crusoe が孤島に一人置かれた時に balance sheet を作って判断したような姿勢によく似ている。相談相手のないのを嘆くのは Moll, Roxana の口ぐせのようなものだが、ひとたび相手が得られると、議論がはじまり、これが Roxana のとる道の有力な選択要因になっているのである。reason は動詞でいえば無論 use argument の意味であるから、前節で指摘した議論の部分は、実は Roxana の reason を常に忘れぬ性格を物語っているともいえる。Defoe の作品が何か議論小説のような趣きが存在するのもこのような主人公の特性のゆえであろう。計算高いということは、言葉を変えれば醒めていることになる。自己の感情を十分統御抑制しつつ自暴自棄にならず活路をひらいてゆく Roxana である。ところが後半部、ことに Susan の追求の手が厳しくなるにしたがって、この reason の機能は失われてゆく。“take the Bundle; be quick”<sup>15)</sup> という悪魔の声を聞いたのは Moll であった。“Poison him, poison him”<sup>16)</sup> という悪魔のさそいの声を耳にしたのは *The Family Instructor* の悪妻であった。あたかも「娘を殺せ」という声にあやつられるがごとく、Roxana は passion の虜になってゆく。登場人物の特性が reason から passion へと変化してゆくのである。

必死に後を追いまわす Susan と、彼女を殺さねばとても安心できぬ、と狂ったように喚きちらす Amy, また、“...my passion was so great, that for want of Vent, I thought I shou'd have burst.” (284) あるいは “I ran raving about the Room like a Mad-Womam; I had nobody to speak a Word to, to give Vent to my passion.” (323) というように passion で頭脳が混乱している Roxana, この三者の行きついた世界は、mad な世界であたといつてよい。passion という語は O. E. D. によれば、“The fact or condition of being acted upon or affected by external agency; subjection to external force” ともあり、三者が外力、ここでは悪魔の誘惑、にかられているともまた考えられる。puritan の倫理からいえばこのような passion が悪とみなされていたのは周知であり、Defoe も悪魔の人間誘惑の技法のうちこの passion を利用するも

のを重視していたことを思えば、この小説の pattern の最後が明らかになろう。

実の娘まで殺して自己の地位の安定をはかる Roxana の悪はもはや回心にはふさわしからぬ程の罪深さを意味していただろう。だとすると Defoe は最初から Roxana を damned soul として描写し、最終的には悲惨な死という罰を与えねばならぬはずだ。ところが物語の筋はそのような帰結を迎えず、Roxana の物質的繁栄と精神的地獄を暗示するにとどまり、何か筋として唐突な終末という感じを与えている。G. A. Starr によればこれは autobiography の一人称的語りの破産ということになる。彼によると、この物語りには筋を narrate する部分と、回心の視点からみた moral を comment する部分、という二つの異質なものの混在がみえ、この二者を一人称では最終的に処理されなかったのが原因というわけである。回心の場面を描こうにも描けなかったのだ。語り手が死んでは死霊にでも語らせるしかない。Bunyan が *Life and Death of Mr. Badman* で用いたように、Wiseman に comment する役をふりあて、三人称的視点を導入する方法をとればこれは解決できたであろうが Defoe にはこうした technical difficulty を克服することができなかった、というのが彼の論旨である。<sup>17)</sup>

この Starr の自叙伝的語りの崩解という解釈は非常に卓抜したものを感ぜさせるが、実は問題は結末部にもみえるのではない。先に指摘した通り、この物語は後半部に入ると登場人物のもつ特性が reason から passion へと一変してくる。悪魔誘惑の主題が最後の部分で作家の手におえなくなってくるのは、このような劇的概念の導入のためではなかったか。

... But I was not arriv'd to such a Pitch of obstinate Wickedness, as to commit Murther, especially such, as to murder my own Child, or so much as to harbour a Thought so barbarous, in my Mind: But, as I said, Amy effected all afterwards, without my Knowledge, for which I gave her my hearty Curse, tho' I cou'd do little more; for to have fall'n upon Amy, had been to have murther'd myself: But this Tragedy requires a longer Story than I have room for here... (203)

Defoe のことばとして不似合いな Tragedy という語は何か、当初の pattern の行きついた世界が作者の予想外のものであったような感じを与えている。*The Family Instructor*, あるいは、*Religious Courtship* にとった note 的手法でしか、Defoe は劇的世界を描くことはできなかったのかもしれない。以後悪魔的主題を扱うものは fiction の形態をとらず、エピソードの集積を editor が語るという方法をとることになったのもこの理由からであろう。Zimmerman が、“Defoe tries to understand by writing; and as he repeats, he clarifies and develops”<sup>18)</sup> というように Defoe は書きながら試行錯誤をくりかえしていったのであった。そして到達した *Roxana* の世界は、作家の作品はその到達点を示すとともその限界点を示す、という陳腐で的確な言葉のうちにそのまま示されているように思える。

註

Text は Jane Jack 編 (Oxford English Novels) の版を使用した。引用はすべてこの版による。

(1)これに関しては拙稿「宗教人 Robinson Crusoe」, *Osaka Literary Review* 第12号、参照。

(2) J. A. Michie, “The Unity of *Moll Flanders*,” in *Knaves and Swindlers*, ed. Christine J. Whitbourn (London: Oxford University Press, 1974), pp. 75-92.

(3) この書き足しの部分に関しては Spiro Peterson の “Defoe’s *Roxana* and Its Eighteenth Century Sequels,” MS Dissertation in Harvard College Library に詳しいそうだが筆者未見。Alan Dugald McKillop, *The Early Masters of English Fiction*, p. 222.

(4) このような *Roxana* の置かれた case は、1690年代に Defoe が関係したといわれる新聞 *The Athenian Oracle* 紙上の読者投稿 身上相談欄に、またはそれ以後 *Review* 誌上にもあらわれる case に酷似しているという指摘がある。G. A. Starr, *Defoe and Casuistry*, (Princeton: 1971) p. 14.

(5) Spiro Peterson, “The Matrimonial Theme of Defoe’s *Roxana*,” *PMLA*, LXX (1955) p. 174.

(6) この Necessity の概念に Grotius, Pufendorf の law of nature の影響をみているものに Maximilian E. Novak, *Defoe and the Nature of Man*, (Oxford University Press, 1963) がある。*Roxana* に関しては第三章、“The Problem of

Necessity in Defoe's Fiction” に詳しい。

(7) この free woman の原型について。Sutherland は Congreve の *The Way of the World* の Millamant を Starr は Nicholas Rowe の *The Fair Penitent* (1703) の女主人公 Calista をそれぞれ考えている。James Sutherland, *Daniel Defoe: A Critical Study*, (Harvard University Press, 1971) p. 214. G. A. Starr, *Defoe and Spiritual Autobiography*, (New York: Gordon Press, 1971) p. 175.

(8) この悪例を描きつつ読者に moral を説くという教訓性を当時の大衆小説全般について調べたものに、John J. Richetti, *Popular Fiction Before Richardson*, (Oxford, 1969) がある。

(9) Defoe の occult work 中おもに *The History of the Devil* と *Moll Flanders* の関係を論じた拙稿「Moll Flanders と内なる悪魔」防衛大学校紀要、第32輯 pp. 305-24. 参照。

(10) この小説中実名で登場する唯一の人物、Sir Robert はまさに Shinagel がいうように “a puzzle to Defoe scholars” である。Shinagel によれば彼は17世紀末から18世紀初頭にかけて実在した人物で、scrivener から身を起し、moneylending で蓄財をはたしたいわば典型的な新興ブルジョアで当時も有名であり、Defoe も *Tour* 中に引用している程だというのである。Text の編者、Jane Jack もこの説を入れ、“a well-known economist whom Defoe greatly admired.” (382) と註している。が、伝記作家 John Robert Moore によると Defoe が Clayton を好意的に見ていたはずがないという。彼は1703年の Defoe 裁判の時の判事で Defoe 生涯の敵 Charles Duncomb と通じていたから、Roxana の “good Sir Robert” という口調にむしろ Defoe の satiric remark を読みとるべきだとしている。Michael Shinagel, *Daniel Defoe and Middle-Class Gentility*, (Harvard University Press, 1968), pp. 185-6. John Robert Moore, *Defoe in the Pillory and Other Studies*, (1939; rpt. New York: Octagon Books, 1973) pp. 44-49. ただ小論の骨子である pattern の関係からいうと、前者の意見を入れたい気がする。

(11) “In other words, it seems to me quite mistaken to regard the debate between Roxana and her Dutch Merchant simply as an extreme statement of Defoe's characteristic feminism.” Starr, *Defoe and Spiritual Autobiography* p. 176.

(12) *Moll Flanders*, ed. Edward Kelly, Norton Critical Edition, p. 158.

(13) J. P. Hunter, *The Reluctant Pilgrim*, (Baltimore, 1966) p. 89.

(14) Necessity-Avarice という二段階 pattern に関しては Starr も指摘しているが (*Spiritual Autobiography*) より包括的議論は “1. Necessity tempts the poor man; 2. Avarice tempts the rich.” という *The Complete English Tradesman* からの引用をふまえた Shinagel のもの (*Middle-Class Gentility*, p. 182) が光っている。

Roxanaの主題と構成

- (15) *Moll Flanders*, p. 149.
- (16) *The Novels and Miscellaneous Works of Daniel De Foe*, ed. Walter Scott, vol. XVI. *The Family Instructor*, (1841; rept. New York: AMS Press, 1973) p. 145.
- (17) G. A. Starr, *Defoe and Spiritual Autobiography* pp. 163-5. なお Sutherland は Defoe が急病のためこうなったと考えている。Roxana の序文にみられる Relator と Writer の微妙なくい違いは第三者の補筆のせいであろうとするこの意見も面白い。 *Daniel Defoe: A Critical Study*, p. 213.
- (18) Everett Zimmerman, *Defoe and the Novel*, (University of California Press, 1974) p.150